

吉井源太と明治

《24》

米の原料添加やめる

「日本製紙論」には米粉や胡粉（貝殻から作られる白い粉）のようなものを「光沢ノリ」、白土のことを「石ノリ」と言ったと書かれている。

和紙を漉くときに紙の白さと緻密さを高めるために従来、米の粉が用いられてきた。吉井源太は明治十一（一八七八）年に、これに代えて白土を使うことを勧めた。

「米糊」を用いていたと書かれる場合もあるので、ねばりを利用したように見えるが、米のまま砕いて混ぜる。このように用いられてきた米の量が莫大なものになることを考え、それをやめて、食料にならない白土を使うように主張したのだ。米粉を混ぜて漉くと、虫

害にかりやすくもなる。

この白土の純粋なものは、滑石の細粉である。現在ではタルクとも呼ばれる。柔らかくて蠅のような感触があり、白色、帯綠色。電気絶縁材、滑材、陶磁器、製紙、耐火・保温材などに用いられるものだ。

履歴書の書かれた同三十六（一九〇三）年には、県下の製紙高からして、米粉を白土に代えることによつて、おおよそ五千人余りが一年間に食べると同じ量の米が節約できているはずだと計算した。白土に代えた

明治十一年からの合計量がどのくらいになるか、計算が追いつかないくらいだとしている。

これを使うようになったきっかけは、同十一年の二

月に東京製紙分社という印刷会社から製紙に使ってほしいという依頼があって試したことがあった。白土は洋紙の製造によく用いられるものだ。和紙については、



吉井家の2階に残る源太の書斎（いの町）

以前からいくつかの産地で白土やその他の土を混ぜて紙が漉かれていた。源太のこの時の実験によって白土が有効なものだとわかったので、この後大阪の商人が高知をはじめとした各県に売り広めることになった。

同十八（一八八五）年になると、これを県内で探そうという動きも出た。大阪の商店から取り寄せた場合、一貫目（三・七五キ）あたり十五銭、愛媛県から取り寄せると九銭、県内で製造すればさらに安くなるということを書き記している。

白土には質の違いがあった。紙を漉く時に用いるためにふさわしい、上等のものの特徴は次のようだ。粉末にした時に細かく、とけ

やすい。質が軽くて、沈澱が早い。雲母の質がない。紙原料に混ぜた時に光沢がある。赤みがなく純白である。というものだ。源太はいろいろなところから持ち込まれる白土が製紙に適しているかどうか、試験を頼まれることがよくあった。

「日本製紙論」で源太は、白土は分子が細かいので、三極を漉く時に用いると紙が緻密になるが、当時新しく開発されていたコツピー紙などの上等紙には入

れてはいけなないとしている。白土を入れると重量が増えるので、これを狙って入れたりする事はまさに粗製濫造であり、ゆゆしきことだと禁じている。

（京大大学院研修員、京都府在住）